

仮名字母の出現傾向を用いた『源氏物語』写本の調査

齊藤 鉄也(淑徳大学)

概要：本稿では、これまでの仮名字母の出現傾向の調査結果から得られた知見に基づき、鎌倉時代と室町時代の源氏物語写本の写本間関係の調査結果を報告する。調査対象には、出版またはインターネット上で画像公開されている、源氏物語の一揃えの写本を選択した。調査結果からは、仮名字母の出現傾向を用いて、「書写者同定」や「年代推定」に関する既存の通説の蓋然性を高める結果と、新たな仮説を提案する結果が得られた。

キーワード：源氏物語、写本、仮名字母、教師なし分類

A Survey of Trends in the Usage *Kana*-character Variant Usage

in Various Manuscripts of *The Tale of Genji*

Tetsuya Saito (College of Business Administration, Shukutoku University)

Abstract: This paper examines the relationships between certain Kamakura-period (1185-1333) and Muromachi-period (1336-1573) manuscripts of the *Tale of Genji*, building upon the findings of previous studies of manuscript usage-frequency patterns in *kana*-character variants. This study limited its survey to complete manuscripts of the *Tale of Genji* available either online as images or in published facsimile editions. The results obtained by this study showed that by using analysis of usage-frequency patterns in *kana*-character variants, it is possible not only to further strengthen the probability of certain pre-existing hypotheses, about questions such as copyist identification and manuscript dating, but also to enable the formulation of various new hypotheses in these areas.

Keywords: *The Tale of Genji*, Manuscripts, *Kana*-character Variants, Clustering

1 はじめに

本稿では、これまでの仮名字母の出現傾向の調査方法と調査結果[1,2,3,4,5,6]から得られた知見に基づき、鎌倉時代から室町時代に書写された『源氏物語』写本の仮名字母を対象とした、計量的な調査結果を報告する。調査方法には、仮名字母の出現傾向(分布)に対して教師なし分類を、仮名字母の出現頻度に対して仮説検定を用いた。

調査では、最初に、本方法で未調査であった写本を、これまで調査した写本と共に再調査し、同筆の可能性のある写本間関係を指摘した。次に、鎌倉時代から室町時代に書写された写本の仮名字母とその書写年代との関係、特に、書写年代時代に特徴的に出現する仮名字母の指摘を試みた。

2 本研究の目的と本調査の位置付け

本研究で対象としている、変体仮名の元となった漢字である仮名字母の出現傾向を調査する目的は、いわゆる「字母遣い」の特徴に基づいた写本間関係の指摘によって、書写者や書写年代に関する仮説を提案し、写本調査の一助とすることである。変体仮名は古典籍に遍在するため、変体仮名の字母を対象とした調査は、全ての古典籍を対象とすることができ、その調査方法の開発や調査結果の応用の有用性は高いと考えられる。

仮名字母の出現傾向は、同一の作品の写本であっても、写本ごとに異なるため、書写者の特徴量

として利用できる可能性がある。これまで稿者は、写本に出現する仮名字母を、同音の仮名ごとにその相対頻度を求め、それを仮名字母の出現傾向と見做し、主成分分析や階層的クラスター分析といった教師なし分類方法を用いて、写本の分類を試みてきた。教師なし分類方法を用いる理由は、写本の書写者が不明であることによる。写本の奥書に基づいた、書写者が明らかな写本は少ない。多くの写本においては、その筆跡から伝称筆者が指摘されているが、その真偽は不明であり、伝称筆者を教師情報とした教師あり分類方法は利用できない。このため、特徴量に基づいた計量的な分類の結果と解題の記述を比較する必要がある。

この比較に基づいた調査結果からは、一揃えの写本に出現する仮名字母の出現傾向を用いた統計的分類による結果と、伝称筆者として指摘される書写者による分類が一致する可能性があることを明らかにしてきた。これは、本方法を用いることで、奥書といった写本の外部徴証だけではなく、写本本文の特徴といった内部徴証から、写本間関係を指摘できる可能性を示し、写本の「書写者同定(著者推定)」や「親本の書写者推定」、書写者が明らかな写本との比較に基づく「年代推定」に関する仮説を提案できることを示している。これまでの日大本[2]、大島本[3]、尾州家本[4]、池田本[5]といった源氏物語写本の調査結果からは、「書写者同定」や「親本の書写者推定」に関して以下のことが明らかになっている。

「書写者同定」では、仮名字母の出現傾向を用いて、同一人物によって書写された(同筆の)写本が分類できることを明らかにしてきた。最初に、奥書や筆跡、書誌から同筆とされる写本を調査し[1,2,3], 同筆の可能性のある写本を分類する尺度を提案した[4,5]。次に、その尺度を用いて、他の一揃えの写本に対して、同筆の可能性のある写本の探索を試みた[6,7]。分類結果と解題に記述されている書誌情報とを比較し、本方法の有効性を確認した。その結果、多くの場合、解題にて同筆と指摘される写本や、伝称筆者を同じくする写本、伝来を共にする写本といった、関係が指摘されている写本が、本方法による分類結果と一致することを示した。加えて、奥書に基づき書写者と書写年代が明らかな写本と共に分類される写本は、同時期に書写された可能性が指摘できることから、「年代推定」が可能であることを示した。

「親本の書写者推定」では、同筆の可能性があると分類された写本の中には、筆跡が異なる写本が存在することや、同筆との指摘がされながらも、仮名字母の出現傾向が異なり、本方法では同筆の可能性を指摘できない写本が存在することが明らかになった。前者の場合には、仮名字母まで忠実に親本を書写した可能性が指摘でき、「親本の書写者推定」が可能になると考えている。この例としては、紅梅文庫旧蔵本「横笛」や書陵部蔵三条西家本「帯木」がある[6]。これらの写本は、筆跡や伝称筆者は三条西実隆とは異なるが、三条西実隆の仮名字母の出現傾向に類似し、実隆筆写本と写本群を構成する。後者の場合には、実隆筆の「新撰菟玖波集」や日大本「花宴」がある[2]。これらの写本は、その他の実隆筆写本とは異なる仮名字母の出現傾向を持つため、その出現傾向に基づく、実隆筆に分類できず、その理由も本方法では明らかにできない。これらの結果は、仮名字母の出現傾向の調査によって初めて明らかになった特徴であり、その理由は、本方法による継続的な調査や、文献学や書誌学の方法によって確認や検討される必要があるだろう。

本調査では、これまで調査した写本も含み、鎌倉時代から室町時代に書写されたと考えられる写本を対象に、仮名字母の出現傾向が類似する写本と、特徴的な出現傾向を持つ仮名字母を探索した。これまでの写本調査では、特定の一揃えや同一人物が関わったとされる写本群、同一の作品や巻といった、特定の条件に該当する写本を対象に行われることが多い。これに対して本研究では、作品や巻、書写年代が異なる大量の写本も対象に、統一的方法により網羅的に調査することを試みている。これは、最初に調査に必要な計量的な条件を明らかにし、一貫した方針に基づいた本文データを作成しているの、これまで蓄積した知見の、新しく調査対象とした写本への適用が容易であることによる。これにより、異なる一揃えの写本間で同筆の可能性のある写本の指摘や、長期間

に渡る仮名字母の特徴やその変化の傾向の発見することが期待できる。

この利点を用いて、これまで本方法で未調査であった写本を対象として、調査済みの写本を含めて再調査し、異なる一揃えの写本間で同筆の可能性のある写本の指摘を試みる。さらに、長期間に渡る仮名字母の特徴やその変化の傾向の発見するために、鎌倉時代から室町時代の写本を調査する。前稿[7]では、この初期的な調査として、鎌倉時代後期と室町時代中期から後期の写本の比較書写年代が指摘されている写本を対象とした。その結果、特定の字母が特定の時代に出現することを明らかにした。今回は新たに調査した鎌倉時代中期の写本を含めて、再調査する。

3 仮名字母を用いた写本調査

本調査では、鎌倉時代前期から室町時代後期までの写本を対象として、写本本文の仮名字母に基づく、写本間関係や書写年代に特徴的に出現する仮名字母を指摘する。写本の書写年代は、書誌に指摘される年代に従い、鎌倉と室町時代を前期、中期、後期に分けた。写本の推定書写年代に幅がある場合はより後の時代を指定し、写本を分類している。室町前期は南北朝時代と、室町後期は戦国時代と重複している。

3.1 調査対象写本と本文データ

本調査では、本方法を用いて、これまで全帖を対象とした調査を行なっていなかった、鎌倉時代中期以降に書写された『源氏物語』写本である、陽明文庫本、保坂本、御物本と、室町時代中期書写の高松宮家本と、室町時代後期書写の岩国徴古館蔵吉川(青表紙)本、蓬左文庫蔵三条西家本を新たに追加して調査した。今回調査した写本を含めると、出版され、利用が容易な『源氏物語』写本の本文データ入力は終了したと考えられるため、前稿[2,4,5,6,7]までに報告した、書写年代に近い写本も含めて比較する。

これらの写本の本文データの作成方法は、前稿と同様である。稿者が調査に用いた本文データは、写本の本行本文の 5000 文字程度を調査対象範囲とし、そこから変体仮名を収集している。これは、これまでの調査[1,2]により、本文を 5000 文字程度調査すると、仮名字母の出現傾向が一定になることが明らかになっていることに基づく。本文データは、写本と同一の行数と仮名字母、改行位置を持つ。写本の本行本文にあるミセケチや挿入といった傍記された仮名は調査対象としていない。この理由は、脱落に対する補入や修正後の文字は、伝来の過程で追記される場合もあることから、本文と同一書写者とは限らず、筆跡からは、その判断が困難であることに基づく。一音で読む漢字は、仮名と見做して採字している。この方法により作成した、今回新たに調査した写本の本文データは、本稿末の表 1 にまとめている。

3.2 調査方法

本調査では、鎌倉及び室町時代写本を中心として、「書写者同定」を行い、その結果から同筆の可能性のある写本を指摘する。これらの写本の中には、筆跡が異なる場合もあるため、「親本の書写者推定」に該当する写本も含まれる。

調査方法としては、写本の仮名字母の出現傾向に対して、階層的クラスター分析を行い、教師なし分類を試みる。階層的クラスター分析で用いる調査対象の写本間距離の計算方法には IR 距離[8]を、群構成方法には、群平均法を用いている。

分析結果は、同筆の可能性のある距離で分類する。これまでの調査[4,5]から、本調査方法を用いた場合、写本間距離が 1.61 以下であれば、同筆の可能性があり、0.66 以下であれば、仮名字母の出現傾向が同一と見做せることが明らかになっている。本調査でも、この写本間距離の尺度を用いて、同筆の可能性のある距離以下で群を構成する写本の探索をすることとした。

4 鎌倉中期写本の書写者推定

最初に、鎌倉中期書写とされる写本を含む、陽明文庫本、保坂本、御物本の各写本を対象に同筆の可能性のある写本を指摘する。次に、これら写本を鎌倉時代に書写された写本と比較する。写本の分類結果は表 2 にまとめている。

4.1 写本調査

陽明文庫本は、54 帖の写本であり、鎌倉時代中期に書写された 34 帖を中心とする。加えて、鎌倉時代後期から南北朝時代に書写された 17 写本と、江戸時代前期書写とされる 3 帖である「初音」「藤袴」「匂宮」を含む。江戸時代前期書写とされる 3 帖の他に、「幻」「橋姫」「総角」は、この 3 帖と似た筆跡で本文が補写されている。補写されている一部の本文は、鎌倉時代の本文のデータとは別データとして扱っている。

陽明文庫本の調査結果は、南北朝期に書写された青表紙(定家)本を中心とした 10 写本が群を構成する。但し、全ての写本の伝称筆者が同一ではなく、「濡標」だけ異なる。しかし、解題によれば「濡標」は表表紙が異なるが、「濡標」を含め、本文の料紙と筆蹟(筆跡)の点から同筆と指摘されている。また、上記の江戸時代前期書写の 3 帖と補写されている 3 帖の補写部分の本文データも、同筆の可能性のある距離で群を構成することから、その指摘が可能である。今回の調査は鎌倉から室町時代にかけての写本間関係の調査が目的であるので、これらは表 2 には記載していない。

保坂本は、「浮舟」を欠く 53 帖の写本であり、「桐壺」から「絵合」までの 17 帖が室町時代後期に補写されている。「松風」以降の 36 帖が鎌倉時代中期に書写された写本である。室町時代に補写された写本は、調査済みであるので[6]、鎌倉時代の写本を調査している。鎌倉時代の写本のう

ち、伝称筆者が指摘されている巻は少なく、それら以外の同筆の巻の存在は不明である。

保坂本の調査結果は、同筆の可能性のある 5 つの写本群を指摘できる。その中には、慈鎮和尚と伝称筆者が指摘される一部の写本である「薄雲」と「手習」が群を構成している。

御物本は、54 帖の写本であり、解題に基づく、鎌倉中期から南北朝時代に書写されたと考えられている。全ての巻に伝称筆者が指摘され、そのうち、複数の巻で同一の伝称筆者が示されている。

御物本の調査結果からは、同一の伝称筆者が指摘される一部の写本が群を構成した。同一の伝称筆者が指摘されている巻は、表 2 に示した巻の他にも存在するが、それらは群を構成していない。具体的に伝称筆者と巻の関係を以下に記述する。尊良親王が指摘される「少女」「宿木」、淨弁律師が指摘される一部の写本である「初音」「柏木」、慶雲法師が指摘される一部の写本である「篝火」「藤袴」、兼好法師が指摘される一部の写本である「幻」「匂宮」、伏見院が指摘される「蜻蛉」「手習」が、それぞれ同筆の可能性のある。

4.2 写本間比較

今回調査した写本に加えて、これまでに調査した鎌倉後期書写の写本[7]も含む、鎌倉時代書写の写本を対象に、同筆の可能性を調査した。調査の結果、その可能性のある写本を表 2 に括弧を用いてまとめた。表 2 の写本群のうち、伝称筆者が同一の場合には、斜体で表している。

異なる一揃えに関しては、写本名を表す略称を用いて記載している。その略称は、前稿[7]に記載した写本一覧に基づき、一文字で示している。異なる一揃えの写本間に同筆の可能性のある写本を指摘できる場合は、筆跡の比較といった他の根拠による確認が必要である。筆跡が同一の場合は、同筆の蓋然性を高めていることになる。筆跡が異なる場合は、その写本の親本の仮名字母を用いて書写した可能性も存在する。後者の場合は、「書写者同定」ではなく「親本の書写者推定」をしていることになる。

表 2 同筆の可能性のある写本群

写本名	同筆の可能性のある写本群
陽明文庫本	(01 桐壺,27 篝火) ((04 夕顔,12 須磨),11 花散里) ((((14 濡標,18 松風),13 明石),44 竹河),17 絵合),((08 花宴,37 横笛),43 紅梅),(07 紅葉賀,36 柏木)) ((16 閑屋,20 朝顔),06 末摘花) (((26 常夏,50 東屋),(10 賢木,40 御法),24 胡蝶),53 手習) (29 行幸,33 藤裏葉) (38 鈴虫,48 早蕨)
保坂本	(19 薄雲,53 手習) (21 少女,29 行幸)

	(25 蚩,54 夢浮橋) (37 横笛,41 幻) ((47 総角,49 宿木),38 鈴虫)
御物本	(17 絵合,37 横笛) (20 朝顔,29 行幸) (21 少女,49 宿木) (23 初音,36 柏木) (25 蚩,34 若菜上) (27 篝火,30 藤袴) (39 夕霧,45 橋姫) (40 御法,42 匂宮) (52 蜻蛉,53 手習)
異なる一揃え	(平 01 桐壺,御 26 常夏) (阿 02 簀木,穂 39 夕霧) (陽 03 空蟬,御 26 常夏) (御 03 空蟬,橋 30 藤袴) ((池 04 夕顔,榊 15 蓬生),陽 09 葵) (池 13 明石,尾 50 東屋) ((尾 16 関屋,尾 24 胡蝶),保 32 梅枝) (天 21 少女,陽 45 橋姫) ((御 17 絵合, 御 37 横笛),((尊 50 東屋,尊 53 手習),(尊 51 浮舟,52 蜻蛉)),尊 54 夢浮橋))

異なる一揃えの「尊」と示した写本は尊経閣文庫蔵伝慈覚筆写本である。これらと御物本は、同筆の可能性はあるが、その境界の下限に近い距離で群を構成していることから、今後の調査によって、より距離に近い写本が出現により、群構成が変更される場合も考えられる。「阿」と示した写本は、東洋大学蔵伝阿仏尼筆「簀木」である。

5 室町中期写本の書写者推定

高松宮家本と、推定を含む書写年代が近く、同一の伝称筆者も指摘されている巻を持つ、大正大学本と書陵部蔵三条西家本を調査する。これらの写本については、同筆の可能性のある写本群を部分的に報告してきたが[6]、今回は、新たに調査した高松宮家本全帖を含めた比較結果を、改めて報告する。写本の分類結果は表 3 にまとめている。

5.1 写本調査

高松宮家本は、54 帖の写本であり、長享 2(1488)年に書写された写本が多くを占める。奥書に記載されている伝称筆者には、室町時代中期から後期にかけて存命していた人物が多い。多くの伝称筆者が一帖または数帖書写している。

高松宮家本の調査結果は、伝称筆者を同じくする一部の写本が群を構成する。知恩院隆句権僧正が伝称筆者である写本は多く、計 13 帖存在する。そのうち一部である「関屋」「篝火」「野分」が写本群を構成する。これまでの調査から、「花散里」や「関屋」「篝火」は、その本文文字数が 2000 字以下と少なく、多くの場合、同筆との指摘がある写本とは、異なる写本群を構成することが明らかになっている。

5.2 写本間比較

異なる一揃えに関しては、高松宮家本と大正大学本、書陵部蔵三条西家本の間で、伝称筆者を同じくすると考えられる写本が群を構成することが多い。これは、筆跡の確認が必要ではあるが、異なる一揃えの写本間で伝称筆者が一致することを示していることから、その指摘の蓋然性を高めている、と考えられる。特に、高松宮家本以外も含む、計 19 写本からなる、知恩院隆句権僧正が伝称筆者の写本を含む群は、甘露寺親長による写本と群を構成する。この分類結果は、親長筆写本を仮名字母まで忠実に書写した可能性を指摘できる事例である。この仮説は、親長筆写本を調査することで検証できる可能性があるだろう。

表 3 同筆の可能性のある写本群

写本名	同筆の可能性のある写本群
高松宮家本	(10 賢木,33 藤裏葉) (14 滌標,36 柏木) ((16 関屋,28 野分),27 篝火) ((25 蚩,29 行幸),38 鈴虫) (39 夕霧,48 早蕨) (49 宿木,51 浮舟)
異なる一揃え	((高 01 桐壺,書三 01 桐壺),大正 03 空蟬) (大正 02 簀木,高 45 橋姫) (大正 09 葵,高 22 玉鬘) (高 15 蓬生,書三 54 夢浮橋) (高 18 松風,日 24 胡蝶) (((高 19 薄雲,書三 33 藤裏葉),書三 04 夕顔),大正 08 花宴) ((((((((高 23 初音,高 26 常夏),高 24 胡蝶,高 44 竹河)),高 42 匂宮,高 43 紅梅)), ((07 紅葉賀,40 御法),41 幻),08 花宴),高 12 須磨),((高 31 真木柱,高 35 若菜下),高 34 若菜上),高 11 花散里),高 37 横笛,大正 04 夕顔),高 09 葵,高 50 東屋))

6 室町後期写本の書写者推定

吉川青表紙本と蓬左文庫蔵三条西家本を調査する。これらの写本と関係する三条西実隆が書写した写本を含む日大本と榊原家本「桐壺」、実隆筆写本を転写したと考えられる紅梅文庫旧蔵本、吉川青表紙本と推定書写年代が近いと考えられる、室町時代補写の保坂本も調査対象に含めた。これらの写本に関しても、これまで部分的に報告していたが[2,6]、今回改めてこの二つの写本全帖を対象に、同筆の可能性のある写本群を報告する。

6.1 写本調査

吉川青表紙本は、岩国徴古館所蔵の青表紙(定家)本系統の 54 帖揃いの写本である。書写年代は、永正 13(1516)年から永正 17(1520)年が推定されて

いる。伝称筆者の中に、三条西実隆とその息子である公順が指摘されている。

蓬左文庫蔵三条西家本は、54 帖揃いの写本である。書写年代は享禄 2(1529)年から天文 2(1533)年が指摘されている。三条西家の人物として、実隆、公条、公順、実枝が書写に参加している。

調査結果は、これまで報告した[2]、三条西家の人物による写本の他に、同一の一揃えの写本内で、伝称筆者と一致する写本が多い結果となった。筆跡に基づく分類と本方法による分類結果が一致することから、その蓋然性を高めていると言える。

6.2 写本間比較

異なる一揃えの写本間で同筆の可能性のある写本群は、前稿[2,6]で報告した内容を含め、三条西家の人物による写本が多い。榊原家本「桐壺」を含む写本群は実隆筆、吉川青表紙本「明石」を含む写本群は、公順筆と実枝筆の蓬左文庫本「蛭」「紅梅」からなる。

表 4 同筆の可能性のある写本群

写本名	同筆の可能性のある写本群
吉川青表紙本	(15 蓬生, 49 宿木) (37 横笛, 38 鈴虫) ((47 総角, 50 東屋), 24 胡蝶) ((48 早蕨, 53 手習), 36 柏木)
蓬左文庫蔵三条西家本	((07 紅葉賀, 22 玉鬘), 26 常夏) (10 賢木, 48 早蕨) (20 朝顔, 30 藤袴) ((24 胡蝶, 54 夢浮橋), 45 橋姫), 17 絵合) (27 篝火, 29 行幸) (44 竹河, 46 椎本)
異なる一揃え	(保 01 桐壺, 吉 09 葵) (((榊 01 桐壺, 蓬 03 空蟬), 吉 02 簞木), 紅 37 紅梅) ((蓬 05 若紫, 蓬 50 東屋), 吉 25 蛭) (吉 06 末摘花, 蓬 38 鈴虫) (蓬 08 花宴, 吉 43 紅梅) ((吉 13 明石, 吉 34 若菜上), (((日 36 柏木, 日 52 蜻蛉), 日 46 椎本), ((蓬 18 松風, 蓬 23 初音), (蓬 25 蛭, 蓬 43 紅梅))), 日 12 須磨)) (((書三 28 野分, 吉 54 夢浮橋), 保 08 花宴), 保 03 空蟬) (((蓬 41 幻, 蓬 42 匂宮), 蓬 53 手習), 吉 12 須磨), 蓬 09 葵)

7 鎌倉及び室町時代写本の写本間関係

これまでに調査した全写本を含み、鎌倉時代と室町時代の写本を比較し、同筆の可能性のある写本を探索した。これらは異なる時代に書写されていることから、同筆の可能性がある場合には、それらの写本の親本の仮名字母を忠実に書写した

可能性を持つ写本間関係にあると考えられ、「親本の書写者推定」を行っていることとなる。

調査の結果、書写年代が異なると考えられる写本のうち、鎌倉後期書写とされる甲南女子大学本伝冷泉為相筆「紅葉賀」と室町初期書写とされる静嘉堂文庫本伝冷泉為秀筆「空蟬」、鎌倉末期書写とされる穂久邇文庫本「蜻蛉」と室町後期書写とされる吉川青表紙本「紅葉賀」、鎌倉中期書写とされる陽明文庫本「簞木」と室町後期書写の日大本「葵」が群を構成した。

甲南女子大学本「紅葉賀」と静嘉堂文庫本「空蟬」は相対的に書写年代が近く、伝称筆者も親子関係があるので同筆の可能性もあり、筆跡の確認をする必要がある。その他の写本に関しては、書写年代が 100 年以上隔たり、その関係を説明することは困難である。階層的クラスター分析を用いた調査方法では、関係が指摘される未調査の写本を含めて再調査すると、分類結果が変化する可能性もあるため、継続的な調査が必要であろう。

この結果からは、仮名字母の出現傾向を用いた調査では、異なる一揃えの間で、同筆の可能性を指摘できる写本は少なく、その可能性を指摘できる場合は、同じ一揃えの写本や、伝称筆者が同一とされる写本、同時代に書写される写本といった、書誌情報に何らかの関連性がある写本であることが多いという、これまでの一揃えの写本調査の知見を裏付けることとなった。同筆の可能性を指摘できる写本が少ないことから、指摘できた写本に関しては何らかの関係を持つと考えられる。現段階ではその関係の説明が困難であっても、本方法による継続的な調査や、資料の探索と調査、複数の異なる方法の適用や開発によって何らかの知見を得られる可能性があり、その蓋然性を検討し、高める必要があるだろう。

8 書写年代と仮名字母の調査

書誌情報に指摘される書写年代と、写本に出現する仮名字母との関係を調査する。最初に、全ての仮名字母を対象としている出現傾向を用いた分類の可能性を検討する。次に、特定の仮名字母を用いた分類の可能性を検討する。

書写年代を考察するために調査対象とした写本は、次の通りである。鎌倉前期写本としては、ハーバード大学本「須磨」「蜻蛉」、中山本「若紫」「鈴虫」、蓬左文庫本「松風」、天理図書館本「柏木」、圓福寺本「幻」、尊経閣文庫本「柏木」の定家筆部と他筆部の 8 写本、計 9 本文データを選択した。鎌倉中期写本としては、陽明文庫本と保坂本、尾州家本のうちの鎌倉中期書写とされる写本、伝阿仏尼本「簞木」の計 81 写本を選択した。鎌倉後期写本は、池田本のうちの鎌倉時代後期書写とされる写本、玉里文庫古筆本、伏見天皇(吉田)本、穂久邇文庫本の計 76 写本を選択した。

室町前期写本としては、陽明文庫本、尾州家本、池田本のうちの南北朝時代書写とされる計 9 写本を選択した。室町中期写本としては、高松宮家本と大正大学本の計 62 写本を選択した。室町後期写本としては、吉川青表紙本と蓬左文庫蔵三条西家本、室町時代書写とされる保坂本の計 83 写本を選択した。これら写本数は、同筆の可能性のある写本を除いた数で、一揃えの全写本ではない。

8.1 時代による分類

仮名字母の出現傾向を書写年代ごとに分類できる可能性を調査するために、主成分分析と、二次分析として非階層的クラスター分析を用いて分類を試みた。この結果を図 1 に示す。図 1 では、楕円で分類された群を、群内の数字で写本を示し、その多くが占める書写年代を記載している。

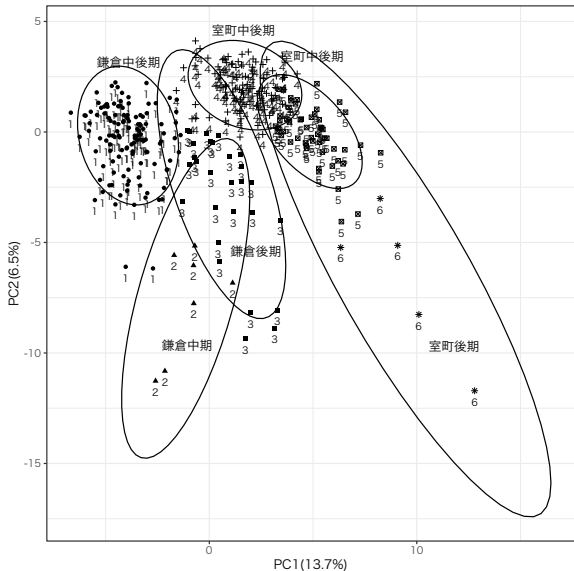


図 1 主成分分析結果

今回用いたデータからは、第一主成分が 13.7%、第二主成分が 6.5%と寄与率が低い、一部誤分類された写本も存在しながらも、おおよそ鎌倉と室町時代に分類できた。これを表 5 にまとめた。

表 5 書写年代と分類結果

群	鎌倉前	鎌倉中	鎌倉後	室町前	室町中	室町後
1	6	74	38	8		
2	1	6				
3	2		26			
4		1	10	1	37	52
5			2		20	31
6					5	

この結果からは、仮名字母の出現傾向からなる合成変数を用いた場合、鎌倉や室町といった時代の分類は可能であるが、細分化された書写年代を明らかにできる可能性は低いと考えられる。階層

的クラスター分析を用いた結果からも、同様に、多くの写本が鎌倉と室町時代に分類できている。但し、鎌倉前期と室町前期の写本数が少ないため、今後、この調査結果は変更される可能性もある。

8.2 時代に特徴的な仮名字母

推定書写年代を元に、鎌倉時代の 166 写本と室町時代の 154 写本に特徴的な字母を探索した。これらの写本に出現する仮名字母のうち、特徴的な傾向を持つ仮名字母は 101 種類存在した。さらに、これらの仮名字母を、フィッシャーの正確確率検定を用いて、有意水準 1% で検定したところ、37 種類の字母が有意であることが明らかになった。これらの仮名字母とそれぞれの時代に出現する写本数を表 6 にまとめた。前稿[7]にも指摘した「新(し)」「數(す)」「所(そ)」「无(も)」や「津(つ)」「農(の)」「濃(の)」に加え、「江(え)」が時代ごとに出現する写本数が大きく異なる。

表 6 鎌倉と室町時代に特徴的な仮名字母

	字母	鎌倉	室町		字母	鎌倉	室町
1	阿(あ)	135	143	20	二(に)	110	20
2	江(え)	66	5	21	年(ね)	66	100
3	盈(え)	52	105	22	農(の)	5	110
4	閑(か)	86	122	23	濃(の)	2	46
5	起(き)	79	151	24	半(は)	52	18
6	遣(け)	163	124	25	飛(ひ)	104	125
7	希(け)	62	120	26	婦(ふ)	140	151
8	氣(け)	114	149	27	邊(へ)	52	13
9	新(し)	115	7	28	無(む)	86	107
10	數(す)	36	1	29	无(も)	51	1
11	勢(せ)	153	115	30	母(も)	29	7
12	所(そ)	56	1	31	游(ゆ)	73	119
13	堂(た)	165	139	32	世(よ)	117	139
14	地(ち)	53	122	33	羅(ら)	117	137
15	津(つ)	11	104	34	累(る)	142	98
16	帝(て)	53	96	35	連(れ)	124	149
17	登(と)	125	146	36	路(ろ)	89	126
18	丹(に)	34	127	37	王(わ)	154	153
19	耳(に)	101	139				

研究者の調査や経験による、時代に特徴的に出現する仮名字母の指摘は、その出現傾向の差が大きい場合に指摘できると考えられる。表 6 に指摘した仮名字母のうち、相対的に出現写本数の差が小さい仮名字母は、時代に特徴的な仮名字母としては認識されにくい可能性がある。上記に指摘した仮名字母に対して、ファイ係数を用いた効果量を計算したところ、中から大であったことから、これを裏付けていると考えられる。

8.3 書写年代に特徴的な仮名字母

同様の方法を用いて、書写年代が異なる写本群の間で出現傾向が変化する仮名字母を調査した。表 7 では、出現傾向の増減を上下の矢印で示す。鎌倉前期と室町前期の調査対象写本数が少ないため、その時代の仮名字母の出現傾向は不明なことが多い。今後、再調査が必要であると考えられ、この結果は変更される可能性がある。

表 7 書写年代に特徴的な仮名字母

	鎌倉時代		室町時代		
	前→中	中→後	後→前	前→中	中→後
1	遅(ち) ↓	江(え) ↓	連(れ) ↓	盈(え) ↑	伊(い) ↑
2		閑(か) ↑		起(き) ↑	丹(に) ↑
3		起(き) ↑		希(け) ↑	悲(ひ) ↑
4		具(く) ↑		地(ち) ↑	万(ま) ↑
5		氣(け) ↑		津(つ) ↑	世(よ) ↑
6		子(こ) ↑		丹(に) ↑	梨(り) ↓
7		新(し) ↓		農(の) ↑	類(る) ↓
8		壽(す) ↓		屋(や) ↑	
9		楚(そ) ↑		遊(ゆ) ↑	
10		所(そ) ↓		流(る) ↑	
11		帝(て) ↑		連(れ) ↑	
12		丹(に) ↑			
13		耳(に) ↑			
14		年(に) ↑			
15		婦(ふ) ↑			
16		見(み) ↑			
17		無(む) ↑			
18		无(も) ↓			
19		屋(や) ↑			
20		遊(ゆ) ↑			
21		夜(よ) ↑			
22		世(よ) ↑			
23		羅(ら) ↑			
24		流(る) ↑			
25		連(れ) ↑			
26		路(ろ) ↑			

例を示すと、表 7 では、鎌倉前期から中期にかけて、「遅(ち)」の出現数が減少することを表している。表 7 に記載されていない仮名字母は、長期間に渡って変化している可能性や、変化の程度が小さい可能性がある。

調査対象写本数が多い、鎌倉中期から後期と室町中期から後期を比較すると、鎌倉時代の仮名字母の出現傾向の変化は大きい可能性がある。この結果も、大量の写本を対象とした、計量的な方法によって初めて明らかになった結果であり、他の方法による確認が必要である。

9 まとめと今後の課題

本稿では、鎌倉時代から室町時代にかけての『源氏物語』写本を対象に、仮名字母の出現傾向を調査した。これまでの仮名字母の出現傾向の知見を用いて「書写者同定」や「親本の書写者推定」に加えて、時代や書写年代に特徴的に出現する仮名字母を調査した。

本調査の結果、同じ一揃えまたは同時代といった書誌情報が関連する写本を除くと、仮名字母の出現傾向が類似する写本は少ないことが明らかになってきた。このことは、写本の書写者は、転写の過程において、仮名字母を自由に変更することを示唆し、書写者の特徴量として利用できる、と言える。それゆえ、何らかの関係が事前に指摘されていない写本において、仮名字母の出現傾向が類似する場合には、伝来に関して何らかの理由が存在する可能性がある。書誌情報が限られ、位置付けが不明な写本に対しても、本方法によって、

同筆の可能性の指摘や書写年代の検討が可能となり、写本の調査に貢献ができると考えられる。

多様な方法を開発し、それを利用した写本調査により、これまで明らかにされてこなかった写本に関する事実の指摘や知見の獲得が可能であろう。今後も写本本文の特徴と書誌情報の関係に着目し、計量的な調査を継続していきたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP19K00349 の支援により実施されました。

出典

- 1) 陽明文庫本：陽明文庫編『陽明叢書国書篇第 16 輯 源氏物語 1-16』，思文閣出版，1979-1982.
- 2) 保坂本：伊井春樹編『保坂本源氏物語 1-12』，おうふう，1995-1997.
https://emuseum.nich.go.jp/detail?content_base_id=100412
- 3) 御物本：日本古典文学会監修『御物各筆源氏』，貴重本刊行会，1986.
- 4) 高松宮家本：山岸徳平(解説)：高松宮御蔵河内本 源氏物語，臨川書店(1973,1974).
- 5) 吉川(青表紙)本：吉川史料館蔵青表紙本，整理番号 555
- 6) 蓬左文庫蔵三条西家本：源氏物語青表紙本 54 巻・目録 2 巻・極 1 巻 56 冊・1 冊 請求番号 1-164-460000
- 7) 圓福寺本：佐々木孝浩「飯沼山圓福寺蔵源氏物語『まほろし』帖：解題・影印・翻刻」斯道文庫論集，2018.
- 8) 阿仏尼本「簞木」：東洋大学附属図書館蔵/河地修・古田正幸 解説翻刻『阿仏尼本はまき木』，勉誠出版，2008.

参考文献

- [1] 齊藤鉄也：仮名字母の出現傾向を用いた藤原定家書写資料の調査，情報処理学会論文誌，Vol.59, No.2, pp.315-322(2018).
- [2] 齊藤鉄也：仮名字母の出現傾向を用いた日大三条西家本源氏物語の調査，じんもんこん 2018 論文集，p.59-66(2018).
- [3] 齊藤鉄也：仮名字母の出現傾向を用いた大島本源氏物語の調査，じんもんこん 2019 論文集，pp.157-164(2019).
- [4] 齊藤鉄也：仮名字母の出現傾向を用いた尾州家河内本源氏物語関連写本の調査，情報処理学会論文誌，Vol.61, No.2, pp.144-151(2020).
- [5] 齊藤鉄也：仮名字母の出現傾向を用いた池田本源氏物語の調査，じんもんこん 2020 論文集，pp.121-128(2020).
- [6] 齊藤鉄也：仮名字母の出現傾向から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付け(2)，実践女子大学文芸資料研究所年報第 40 号 pp.181-198 (2021).
- [7] 齊藤鉄也：仮名字母の出現傾向が類似する鎌倉時代書写の源氏物語写本の探索，じんもんこん 2021 論文集，pp.162-169(2021).
- [8] 金明哲：テキストデータの統計科学入門，岩波書店(2011).

表 1: 調査対象とした源氏物語写本の仮名文字数(左列)と仮名字母種類数(右列)

巻名	陽明文庫本		保坂本		御物本		高松宮家本		吉川(青表紙)本		蓬左三条西家本	
	文字数	字母数	文字数	字母数	文字数	字母数	文字数	字母数	文字数	字母数	文字数	字母数
01-桐壺	6019	93	5857	116	5751	102	6039	101	5429	111	5736	117
02-帚木	5801	100	5565	105	5710	95	6036	118	5867	120	5906	107
03-空蟬	4602	93	4464	117	4676	89	4600	106	4499	115	4573	111
04-夕顔	5569	92	5568	104	5663	114	5873	100	5285	118	5513	105
05-若紫	5402	105	5370	114	5543	104	6010	118	5205	114	5335	117
06-末摘花	5682	83	5546	112	6134	111	6006	92	5803	99	5457	95
07-紅葉賀	5674	88	5762	122	5822	113	6007	94	5715	111	5890	107
08-花宴	4130	84	4272	109	4275	100	4395	95	4288	116	4166	114
09-葵	6330	95	5790	113	6597	104	6721	105	5666	117	6240	102
10-賢木	5696	93	5563	119	5959	113	6110	95	5562	119	5859	123
11-花散里	1558	77	1585	105	1588	91	1752	80	1631	107	1624	101
12-須磨	5436	89	5485	114	5398	96	5839	95	5706	99	5531	108
13-明石	5749	88	5738	117	5903	110	6085	98	5573	110	5882	107
14-滯標	5609	83	5661	117	5783	105	6072	108	5673	107	5746	113
15-蓬生	6076	85	6012	105	5912	107	6628	109	5810	114	6085	112
16-閑屋	2001	80	1917	100	1917	89	2070	86	1951	109	1970	99
17-絵合	5551	89	5449	116	5439	95	5392	119	5563	112	5374	108
18-松風	5209	87	5816	96	5675	111	5282	122	5236	119	5567	103
19-薄雲	5584	84	5838	95	5457	119	5884	109	5366	118	5498	108
20-朝顔	5427	102	5690	119	5542	108	5223	97	5079	101	5420	116
21-少女	5610	99	5741	105	6065	99	5638	104	5593	106	5560	105
22-玉鬘	5064	96	6848	99	5085	109	5245	110	5079	104	5332	98
23-初音	5481	107	6069	106	6074	105	6214	94	5792	107	6135	109
24-胡蝶	5753	91	6246	98	5870	111	5996	92	5716	108	5880	102
25-萤	6146	84	6320	104	6348	119	6227	101	6021	115	6419	106
26-常夏	5957	90	6158	112	6055	97	6227	90	6036	109	6080	92
27-篝火	1369	87	1410	104	1454	93	1326	86	1415	95	1350	102
28-野分	6578	93	7007	117	6795	90	6680	97	6350	106	6688	115
29-行幸	10927	104	11632	126	11576	115	11135	107	11271	115	10722	118
30-藤袴	5362	104	6065	89	5885	104	5744	108	5621	115	5757	119
31-真木柱	6320	97	6915	99	6384	102	6690	96	6090	116	6555	115
32-梅枝	5223	92	5544	96	5454	115	5480	97	5386	110	5581	123
33-藤裏葉	5458	96	5654	114	5561	116	5426	98	5480	119	5123	104
34-若菜上	6088	95	5992	112	5986	112	5985	92	5898	105	5749	99
35-若菜下	5672	96	5601	102	5450	95	5655	90	5622	114	5575	99
36-柏木	5098	81	5501	113	5423	106	5502	102	5148	112	5440	96
37-横笛	5292	84	5784	115	5491	96	5550	94	5490	114	5503	114
38-鈴虫	5757	97	6393	93	6347	113	5996	107	5732	120	5874	100
39-夕霧	5699	93	5751	120	5561	89	5710	106	5335	105	5530	103
40-御法	5709	91	5595	114	5420	91	5792	93	5587	122	5795	117
41-幻	*3174	108	6841	106	6390	109	6469	96	6327	126	6749	107
42-匂宮	5085	104	6262	87	5569	90	5844	94	5767	111	5933	101
43-紅梅	5070	79	5306	102	5117	101	4882	89	5142	116	5323	105
44-竹河	5399	87	5913	94	5513	109	5691	89	5283	112	5567	99
45-橋姫	*3126	91	5136	101	4935	81	4717	105	5009	110	4978	98
46-椎本	5400	96	5609	115	5552	103	5554	106	5520	101	5474	103
47-総角	*3407	96	5788	99	5392	108	5465	88	5717	97	5416	120
48-早蕨	7262	106	6714	118	7572	95	7584	107	7152	113	7708	120
49-宿木	5690	101	5954	94	6137	100	5526	101	5544	115	5654	112
50-東屋	4847	90	6162	86	5826	92	5538	97	5770	96	5698	109
51-浮舟	5265	90			5208	97	5272	102	5239	109	5461	100
52-蜻蛉	4995	101	5722	109	5709	109	5117	116	5371	101	5555	95
53-手習	5240	88	5680	95	5470	110	5166	97	5139	120	5552	103
54-夢浮橋	5237	86	5818	109	5377	104	5081	115	5493	116	5595	99

*: 調査対象範囲に補写あり。伝阿仏尼本「帚木」の文字数は19651, 字母数は125である。圓福寺本「幻」の文字数は6581, 字母数は123である。